

発話理解における「話者イメージ」の果たす役割 ——アイロニー発話と含意表現の分析を基に——¹

岡本 雅史
京都大学大学院
e-mail: JBD03435@niftyserve.or.jp

1. はじめに

これまで発話理解は、語用論分析においても関連性理論においても、哲学者Griceの主張する「言われたこと(what is said)」と「含意されたこと(what is implicated)」の区別に基づき、文の意味(sentence meaning)から発話の意味(utterance meaning)をどのように算出するかに重点が置かれてきた。つまり、命題形式の含意をどのように同定するかにのみ注意が払われてきたと言える。たとえば、LeechやLevinsonらの語用論者は文の意味を意味論的規則によってのみ支配されるものとみなし、発話の意味を語用論的な原理によって算定可能なものであるとみなした。この発話の意味、すなわち「含意」がどのような原理に支配されているのかということが語用論の問題であると主張したのである(cf. Leech 1983, Levinson 1983)。また、関連性理論の枠組みにおいても「表意(explicature)」と「会話の含意(implicature)」の区別は、語用論者と少なからず異なっているとはいえ、一応文の意味と発話の意味の区別に対応するものである。(cf. Blakemore 1992, Sperber & Wilson 1986)

本稿は岡本(1996)をもとに、発話の意味を文の意味の延長上に見るこのような単線的な推論モデルでは、聞き手の発話理解プロセスの説明が不十分であると主張する。なぜならばこうしたモデルでは、含意を命題形式で復元できない発話の存在や意図の階層性、および話し言葉と書き言葉の解釈のずれなどが説明できないからである。このような論点を鑑み、本稿では聞き手にとっての「話者イメージ」が発話理解において重要な役割を果たすことを明らかにし、従来の推論モデルよりも説明力のある階層的発話解釈モデルを提案する。

2. 含意表現における意図の不確定性と階層性

- (1) A: 明日映画を見に行かないか。
B: レポートがあるからね。

典型的な含意表現である(1)のBの発話が聞き手によってどのように解釈されるかという問題に関して、二つの重要な論点を指摘する必要がある。一つは、話し手Bの意図した含意が必ずしも聞き手によって復元されるとは限らず、聞き手の多様な解釈を許してしまうことであり、もう一つは話し手の意図を推論する上で高階の意図の存在を否定できないことである。前者は、発話の意味を話し手と聞き手のどちらに帰属させるべきかという問題を生じさせ、<送り手>—<メッセージ>—<受け手>という旧来のコード・モデルに対する反論となるべき視座を提供し、後者はさらに、こうした意図の階層性は含意表現のみならず字義通りの発話においても存在するので、聞き手の発話理解プロセスはどこで完了したとみなすべきかと

¹ 本研究は文部省科学研究費特別研究員奨励費(「アイロニーなどの修辞表現の分析によるコミュニケーション・モデルの再定式化」5990)の補助を受けている。

いうあらたな問題設定を喚起することになる。

こうした問いに答えるためには、図1のような従来の単線的な推論モデルでは不十分であり、発話理解において聞き手が利用する情報と発話理解の結果同定される情報を考慮したモデルが必要となる。

3. アイロニー発話の含意

アイロニー発話は、近年の研究において意味形式の上から大きく二種類に分けられることが主張されている(安井 1978, 橋元 1989)。

(2) (自分を裏切った友人に対して) あいつはいい友達だよ。(cf. Grice 1989)

(3) A: これでも僕は登山部の部長だったんですよ。

B: ほう、君が部長ねえ。

ここでは安井(1978)にならい、(2)のように字義通りの逆の意味を含意すると考えられるアイロニー発話を「自生的アイロニー(spontaneous irony)」と呼び、(3)のBの返答のように相手の発話の一部ないしは全部を繰り返すことによりアイロニー効果を生じせしめる発話を「おうむ返しのアイロニー(provoked irony)」と呼ぶことにする。

岡本(1996)で明らかにしたように、アイロニーの含意を字義通りの命題の反対命題であるとしたGriceの分析やLeechら語用論者の分析は「おうむ返しのアイロニー」の存在および効果を説明できず、また Sperber&Wilsonらの関連性理論の枠組みにおいては逆に「自生的アイロニー」に対する説明力が不足していた。こうした従来の研究の問題点は(特に語用論者の枠組みにおいて)アイロニー発話の含意を命題形式で復元可能であるとした点にある。すなわち、文の意味と発話の意味を同じレベルで考えることにより、アイロニー発話の含意が直接相手を非難する文とパラフレーズ可能であると錯覚したことから説明に困難をきたしてしまうのである。

聞き手の発話理解のプロセスにおいて、ある発話の意味を理解することは必ずしも、話し手が本当に言いたかったと考えられる文の復元を聞き手が推論によって果たすことを意味しない。たとえば、命題形式の含意が想定しにくい「おうむ返しのアイロニー」やジョークなどはその発話が「アイロニー」や「ジョーク」であるとカテゴリー化された時点で聞き手の発話理解は完了したとみなされるのである²。

4. 階層的発話解釈モデルと話者イメージ

さて、聞き手が発話を解釈した結果、新しい知識として同定する情報はおもに次の三つであると考えられる。すなわち、(1)話し手の意図(「発話内効力」および「発話の原因」を含む)(2)話し手の位置付け(=話者イメージ)(3)復元された含意内容(「字義通りの意味」および「ゼロ意味」も含む)である。ただし、これらの情報全てを同定することは、聞き手の発話処理プロセスにおいては必ずしも必要ではない。

また、これらの情報は新たな発話の解釈にあたってコンテクストとしても作用するが、やはりいずれかの情報が欠落していたとしても発話理解を果たすことは可能である。

言い替えば、あらゆる聞き手はこれらの情報を一組にした「発話解釈スキーマ」を持っており、その

² 従来の枠組みでは説明不可能な「でたらめ」ないしは「無意味」な発話も、このようなプロセスを経ることにより聞き手は「理解」するのであると言える。

スキーマが活性化され、欠落した情報に対してもデフォルト値が挿入されることにより、発話の理解がなされたとみなすのであると考えられる。

この発話解釈スキーマを次のように定義しておく。

(4) 発話解釈スキーマ (図2)

聞き手が発話解釈に当たって用いる発話に関する知識の集合で、変数として(a) 話し手の意図
(b) 話者イメージ (c) 発話内容の三つを持つ。

聞き手はこの発話解釈スキーマを用いることにより、文脈の与えられていない次のような発話を処理することが可能になる。また、この発話スキーマ内では、含意告知装置とも言えるGriceの協調の原則(CP)が同一のレベルで(すなわち複数のレベルにまたがることなく)遵守されているものとして聞き手に認識されており、この発話解釈スキーマの変数(もしくはスロット)は、通常一つ入力されれば発話解釈スキーマが活性化されて他の変数にはデフォルト値が自動的に挿入され、また、二つ以上入力されれば完全に発話解釈スキーマが安定した状態を示すと仮定する。

この発話解釈スキーマと図1で示されるような従来の推論モデルを組み合わせることにより、先に述べたようなアイロニー・ジョークなどの含意を命題形式で復元できない発話や意図の階層性を説明することが可能な「階層的発話解釈モデル」が得られる(図3)。このモデルにより、通常の発話処理プロセスとアイロニー発話の処理プロセスが「話者イメージ」の働きにより異なっていることを明らかにすることができるのである(図4・図5)³。

5. 参考文献

- Austin, J.L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press. (坂本百大(訳)『言語と行為』, 大修館書店, 1978)
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell. (武内道子・山崎英一(訳)『ひとは発話をどう理解するか』, ひつじ書房, 1994)
- Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 橋元良明 1989.『背理のコミュニケーション』 勁草書房.
- Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman Group Ltd. (池上嘉彦・河上誓作(訳)『語用論』, 紀伊国屋書店, 1987)
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子(訳)『英語語用論』, 研究社出版, 1990)
- 岡本雅史 1996.「階層的発話解釈モデルによるアイロニー発話の了解および解釈プロセスの分析」, 京都大学大学院人間・環境学研究科 修士論文.
- Sperber, D. & D. Wilson 1981. "Irony and the use-mention distinction." in S. Davis (eds.) 1991. *Pragmatics*, Oxford: Oxford University Press, 550-563.
- Sperber, D. & D. Wilson 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二・中遠俊明・宋南先・田中圭子(訳)『関連性理論—伝達と認知』, 研究社出版, 1993)
- Wilson, D. & D. Sperber 1992. "On Verbal Irony." *Lingua*, 87, 53-76.
- 安井稔 1978.『言外の意味』 研究社出版.

³ 紙数の都合で、具体的な話者イメージの働きに関しては本発表にて詳細な口頭発表を行う。

6. 図

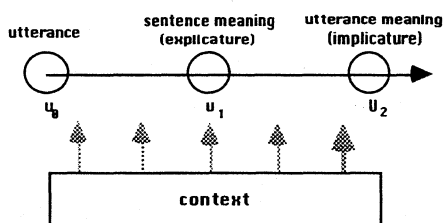


図1 従来の推論モデル

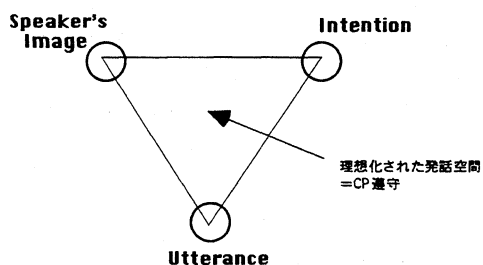
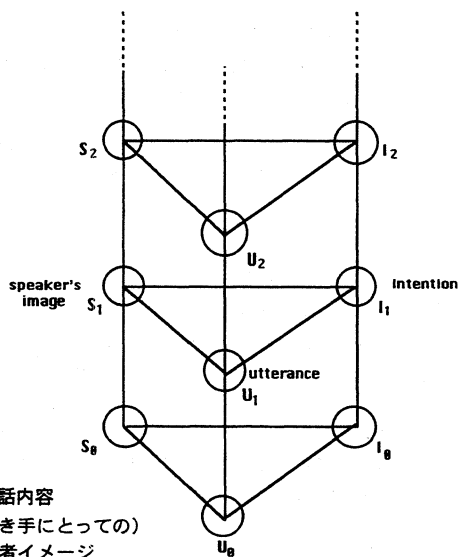


図2 発話解釈スキーマ



U: 発話内容
(聞き手にとっての)
話者イメージ
I: (聞き手の推論する)
話者の意図

図3 階層的発話解釈モデル

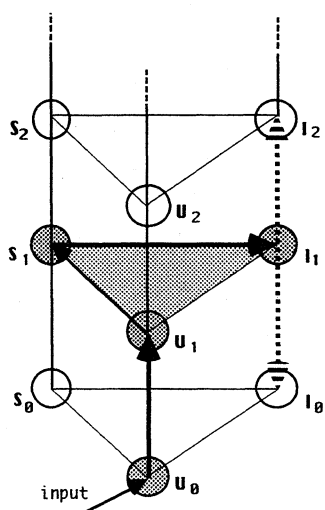


図4 一般的な発話処理プロセス

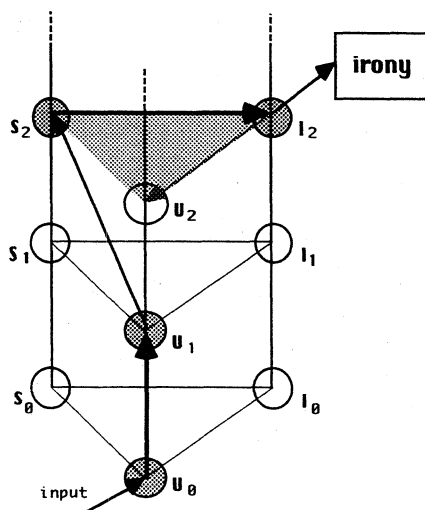


図5 アイロニー発話の処理プロセス